安心感につながる税

国立大学法人鹿児島大学教育学部附属中学校１年　　川上　悠来

「行ってきます。」

今日も玄関で元気な声がこだまする。母はすぐに小窓のある部屋に移動し、歩道橋を歩く姉の姿を見届ける。姉は三月に特別支援学校を卒業し、四月から障がい者が就労を目指し訓練する事業所へ一人で電車通勤している。発達障がいがあり、人とのコミュニケーションの取り方や臨機応変に対応することが苦手という特性がある。

療育手帳を取得している姉は、事業所での訓練費と通勤電車賃は税金で負担していただいている。障がい者が市内間で乗り降りするバス、電車を無料で利用できるパスカード（友愛パス）を申請し、利用させてもらっているのだ。姉が小学五年生の時からの相棒で大活躍。母は姉に公共交通機関の利用の仕方とマナーを覚えてもらいたくて、それから運賃負担を心配することなく共に繰り返し練習し、一人で乗り降りできるようになった。母は言う。時間はかかったけれど、この成果は姉にとって社会に踏み出す大きな一歩であり、行動範囲が広がり社会とつながる大事な権利を得たようなものだと。社会福祉に関わる公共サービスを直接受け、そのありがたみと税の必要性をしみじみと肌で感じたようだ。

それから数年後、姉はさらにヘルプカードを取得し、相棒が増えた。外見では分からないが、周りに支援が必要なことを伝える手段として役立つアイテムだ。これにも税金が投入されている。一人で外出する際は必ずカバンに取り付け、姉の安心感を得ている。

私も時々、姉と二人で電車に乗ることがある。ヘルプカードを取得する以前、実は少し不器用な姉の行動で、周りの方に迷惑をかけ、不快な思いをされた方がいたかもしれない。そんな時は私が母の真似をし、「失礼しました。」「申し訳ありません。」と周りに謝ることもあった。しかし、ヘルプカードという強い味方を得たことで、周りの方の姉を見る目が変わった。姉の行動を温かい眼差しで見守ってくださる方々が増えたように感じる。

私は姉のチャームポイントである笑顔が大好きだ。はじける笑顔も少しはにかんだ笑顔も。元気をもらえるし、心が喜ぶ。私にとって姉は障がいのある姉ではなく、誰とも比べる必要のない個性あふれる姉だ。そんな笑顔に惹かれて、姉の周りでは家族の他にも様々な方が支えてくださっている。福祉制度は、我が家にとって経済、心理両面での拠り所だ。全ての納税者に感謝しながら、姉のために有効活用させていただいている。社会の支え合いの税金を「安心」という言葉に置き換えて、姉は今、笑顔で生活を送ることができている。

その姉が、今度は自分で税金を納める立場になりたいと就職を目指している。明日もリュックの目立つ場所に、お守り代わりのヘルプカードと友愛パスを携帯し、元気に出勤していくだろう。私も将来姉のような人を支える医療従事者になり、税を納得して納めたい。